

前登志夫百首

水原紫苑 選



前登志夫

かなしみは明るさゆるにきたりけり一本の樹の翳らひにけり

『子午線の繭』

あけがたの白くしみゆる杉の木根かたにこぼるいきもの歯は

海にきて夢違観音かなしけれとほきうなさかに帆柱は立ち

もの音は樹木の耳に藏はれて月よみの谿をのぼるさかなよ

あなうらゆ翔びたつ雉の黄金のこゑ天天として樹樹は走れる

地下鐵の赤き電車は露出して東京の眠りしたしかりけり

けものみちひそかに折れる山の上にそこよりゆけぬ場所を知りたり

青吉野とほき五月に料理せし山鳥の胃に茶の芽匂ひき

崖の上にピアノをきかむ星の夜の羚羊は跳べりボンとなりて

空にきく雲雀の聲よわが額に千の巢を編む翔ぶものこゑ

汲みあげる眞晝の井戸の滑車鳴り道行くわれの夏の紅

いつさんに刃物をもちて走りける樹木の部屋にわれは怖し

いくたびか戸口の外に佇つものを樹と呼びてをり犯すことなき

丁丁と樹を伐る晝にたかぶりて森にかへれる木靈のひとつ

森出でて町に入りゆくしばらくは縞目の青く身に消えのこり

夕闇にまぎれて村に近づけば盜賊のごとくわれは華やぐ

歸るとは幻ならむ麥の香の熟るる谷間にいくたびか問ふ

暗道のわれの歩みにまつはれる螢ありわれはいかなる河か

すでに朱の朝の戸口を塞ぎをる誰がししむらぞ青葉翳りて

このわれを生まれ給ひし美はしき母を呪へば三輪山の雨

流木を集めて朝の焚火せり村ひとつ削る心せつなし

岩の上に時計を忘れ來し日より暗緑のその森を怖る

ものみなはわれより遠しみなそこに岩炎ゆる見ゆ雪の來るまへ

この父が鬼にかへらむ峠まで落暉の坂を背負はれてゆけ

さくら咲くその花影の水に研ぐ夢やはらかし朝の斧は

あしびきの山の泉にしづめたる白桃を守れば人遠みかも

おお！ かなかな 非在の歌よ、草むらに沈める斧も昨夜の反響

むらさきに熟るるひそけさわが太刀の撓へる空ゆ紅葉いそげる

かりがねは澄みてわたりぬ二十年のわが谷行の終りを告ぐる

鶉色のボタンをつけて山に入る大なる岩に齋かむとして

あしたには文字みな死せりととりどりの山蛾の群を掃きすててをり

枯山に地圖をひろげてゐたりけりわれよりも小さき神は出て來よ

うつし身の人澄みゆけり消えのこる斑雪を口にふふみてぞ行く

樹のなかを人はかよひきその貌のひとつだになき静けさを來つ

いとけなく神隠しよりかへりきて鞆のある空忘らるず

國栖びとの手渡きの紙に額伏して春あけほのの机にねむる

くれなゐの椿の花を掃きてをる少年のうなじ鞆なきかなしみ

山の樹に白き花咲きをみなこの生まれ來につる、ほとそかなしみ

童蒙のくらきころをかへり行くボートは白く一枚の沖

火を出すと石と石打ち夕闇にうづくまる子は星空ゆ來し

草芥とわれは言ひつも山畑にをのこ子ふたり女童を守る

方尺の引窓の下に紙白く彌勒の秋のしたたりを聴く

鳥獸蟲魚のことばきこゆる真夜なれば青人草と呼びてさびしき

いつみきか、女童擁きて言間はば雪ふる樹樹のたちまちしろし

つばくろの糞白き土間に旅立つと草鞋のごとき寂しきは來つ

ひるがへる若葉のなだり目に見えぬひだるの神は炎のごとし

いまだ見ぬ夢あらばあれ黒南風の夜をかなべて山藪青し

戀ほしめば古國ありき萬緑のひかりを聚めふくろふ睡る

わが父の没落見ゆれ草の上に刃物を研げば尾のある孤獨

みなかみに筏を組めよましらども藤蔓をもて故郷をくくれ

「靈異記」

「繩文紀」

霧ふかき奥千本に憩ひけりわが殘櫻記すべもなからむ

あかときの短き夢に咲きてゐし大山蓮華時間のごとし

黒い星またありありと見えわたる眞晝の額を雪にうづめつ

流離とや、波の秀わたる白鳥にながき戦後をくちずさむかな

鳥栖の峯越えて來しほとときす夏草猛くひとを思へば

朴の花匂へる夜半を明るめば夜の神力をわれに給はな

たてがみははやしめりつつ夜の庭に黒馬あるなり眠れざる夜を

夏こだま妹のちからのそらに澄みて檜原はあをく山の秀にほそる

星見れば天折ありき。冴えわたるひかりのなかを風すぐるなり

食斷ちしひじり思へば青草に金のひかりのふつふつと湧く

銀河系そのまほらを墮ちつづく夏の雫とわれはなりてむ

ゆふやみに菖蒲を打ちてみちのくの古謡つぶやけり罪匂ふまで

なにももの過ぐるいたみぞ引窓の硝子を切りて歌奔るとき

ふりしきる雪のさなかにわが抒ぶるかなしみの枝しなやかなれよ

ふりしきる雪にかすめる山並みを音楽として鹽つかみ出づ

歳木樵るわがたはらにうつくしき女人のごとく夕日ありけり

『樹下集』

凍て星のひとつを食べてねむるべし死者よりほかに見張る者なし

たらちねの母にまぎれし花野にて金の野糞を祀りし少年

億萬の蚯蚓の食める春の野の土の静けさを思ひみるかな

目も鼻もおほるとなりし石洗ふわがをみなこの指のふくらみ

颯風の近づく朝明さびしらに菩薩の肉のふくらみはじむ

森にきて火を焚きをれば日輪のひかり増しゆく悲哀のごとし

まだくらき山の斑雪をみつめる鳥の謀叛を思はざらめや

少年の日より愛できし響きなり永訣といへば霜夜明るむ

首ひとつ提げてさまよふ花野にて望の月出づる静けさに逢ふ

山住みの一日はつねに一首にておのれの首を祀れるごとし

國原に美しき虹かかれるを不吉となしき天の焼畑

雪の日の杉の木伐れり頂上にやさしき牢を作らむとして

いくたびもわれを犯せし山姥の羞らひならむ若葉照れるは

眞つ青な太陽わたる森の奥わが罪狀の朗讀つづく

川ここにはじまるらしもなんといふやさしさぞきみ沐浴すらし

透明な朝のひかりに來歴を書きあらたむる一日一日を

『鳥獸蟲魚』

勾玉は月讀なりと少年のわれに語りし母うらわかく

少女子の残しゆきたる色鉛筆みな携へて秋野さまよふ

夜となりて雨降る山かくらやみに脚を伸ばせり川となるまで

炎天に峯入りの行者つづく昼山の女神を草に組み伏す

秋に照る月の出おそしあくがるる晩年にこそ神隠し来ぬ

くるしみて棄てし故郷に種子播きて胎蔵界のふかきしづもり

かの嶺の岩炎えて飛ぶゆふまぐれ女神のほとに種子をこぼしつ

さくら咲くゆふべとなれりやまなみにをみなのはれながくたなびく

影武者のつとめはとうにをはりしにもみぢを踏めば貴種のごとしも

「青童子」

あはれあはれ 王のしるしの何あらむ全天星座刺客となせど

わが犬は悪しき犬なり山行ける主人を捨てて村をうろつく

舞ふごとく巡禮のゆく春の日のかすめる尾根を窓は嵌めをり

こともなく崩れてゆける夕雲のカテドラルたかしひとを恋ふれば

ゆうらりとわれをまねける山百合の夜半の花粉に貌塗りつぶす

金色の陽をはじきあゝる巖のへに凌辱されし蒼穹まどろむ

韓の国にわれは遊べど心重し家並に棟のかすかなる反り

ふるくにのゆふべを匂ふ山桜わが殺めたるもののしづけさ

ことしまた梟啼きぬわたくしの生まれるまへの若葉の間に

歌の表記・ふり仮名は原則として歌集に準拠しています。

光の尾を曳く山人のうた——前登志夫の世界は、現代短歌の「遠いとほい城」である。

今回初めて全作品を通して読み、百首を選ぶという作業の困難を身にしてみて感じた。前登志夫のうたは、いたずらな選などせず、まるごと味わうべきものなのである。顔のない人が行き交い、空腹になれば星のひとつに手を伸ばして食べられるような、山の時空を歌人は生きて、そのいのちの震えをひたすら調べに乗せている。秀歌を詠もうとする世のつねの意志が先に在るわけではないのだ。

だが、やはり選ばなければならぬので、中でも好きな歌を百首集めた。前登志夫のうたの核心に理解が届いたとはとても言えないのだが、『子午線の繭』が二十二首と多くなつたのは、長年馴染んだ親しさや、鮮烈な衝動に惹かれてのことだが、『靈異記』の純粹な苦痛の表現や、『樹下集』の壮者の充実、そして最新歌集『青童子』の透明な含羞など、もしたたるように美しいと思う。

水原紫苑（みずはら・しおん）「短歌」同人